

平成二十七年三月二日発行 第二十五巻第3号 通巻第285号（毎月一回一日発行）  
平成二十九年九月十八日第三種郵便物認可

# 槐

かい

平成27年3月号

岡井省二創刊



# 手鞠唄

高橋将夫

干芋あぶる父ありし日の火鉢  
はや空気読めると言ふ子冬初め  
その死には事件性なし冬の蝶  
虎落笛レクイエムともアリアとも



ウイルスの進化してゆく神の留守  
冬ゆやけ人生設計延長す  
鑑真の臉の煤も払ひけり  
地球儀を回し地球の煤払ふ  
冬山を起こさず登る歩荷かな  
狐火やほれ手鞠唄子守唄  
絶巔にありて孤高の寒の月



# 槐安集

水野恒彦

薄明の白鳥花のごと眠る  
閑けさの寒林何も翔<sup>た</sup>たしめず  
来し方をさらりと鳩の潜<sup>かづ</sup>きたり  
海光に命透きゆく冬の蝶  
枯蓮の微動だにせず水昏るる

加藤みき

御馳走やされどあつあつ根深汁  
枯柏どこまでも空青かりき  
食すときは皆前かがみお正月  
冬の雨駆けむばかりの神馬像  
寒の靄夢二の女腰にあり



中島陽華

徒步遍路濕布薬は大師かな  
外つ国の牛タン届く小春かな  
般若面桜紅葉の祝園に  
靴べらは水牛の角秋深し  
大枯野乳呑児のこゑ聞いてをり

竹内悦子

石路の花ごみ箱に傘捨ててある  
落款や・大根と煮る烏賊の墨  
雪女の濡らしてゆける封書かな  
闇なれや梟赤き目を持ちて  
二人には程よき冬至南京かな

雨村敏子

枯蓮を抱き大池明けにけり  
あをあをと土黒々と冬菜畑  
熊野灘に鯨見にいく日和かな  
数へ日や木枯節も出し昆布も  
青墨の滲みのぐるり冬の海

本多俊子

晩節は音もなくくる星冴ゆる  
銀ぶちの皿雪の夜となりにけり  
雪とけし日のうすき雲なよなよと  
とつとつと冬木の槇の語りをり  
冬の風眼をとじて見ゆるもの

近藤喜子

星の夜や青女に闇のなまめきぬ  
神事のごとし凍鶴の一步かな  
遠くまで金色を敷く枯野原  
日向ぼこ刹那と永遠の間かな  
黙考に気の散るポインセチアかな

瀬川公馨

口腔を転がり落つる冬の虹  
鍵盤と指の間の水面鏡  
大年の鮫の背中の江戸小紋  
金柑の回青してや年越ゆる  
大狸もちを啜へてはいポーズ

久保東海司

勝ち馬をなだめ枯野を一周す  
天涯に星の私語あり冬木立  
柿の葉の枯れてからから風に鳴る  
稲雀群れの落着く鬼瓦  
流人めく木枯の街古書探す

岩下芳子

日当りに河豚の鱈干す二百枚  
冬日向青きパインの熟れはじむ  
風花の舞ひ上りたる鷹ヶ峰  
砂を噴く冬の泉の生きてをり  
上座にはすでに冬日の来てをりぬ

柳川 晋

花と牛と仏と笑ふ翁かな  
祝上梓  
極月に入るや劇場型の日々  
紅葉散り紅葉を蹴つて明日へ行く  
焚火して残り火といふ時の中  
数へ日となりて働きだす翁

近藤紀子

雪吊の枝に残れる實の赤し  
枯色の草の手触りみなやさし  
冬日さす壺に遊女の袖の紅  
大笹に蕪のひとつありにけり  
子のつむり洗ふがごとく蕪洗ふ

岩月優美子

マフラーの赤さ余生を楽しまむ  
歌麿の美人画鶴の立つやうな  
ゴスペルにこころ痺れる十二月  
霜月や過ぎ去りし夢手繰りたる  
旅日記まだ途中なり霜降る夜

竹中一花

一休の笑ひ聲かや冬の風  
押しくら鰻頭母真ん中に押されをり  
オレンジの星はみはるや冴返る  
霜降や弓のかたちの朱き橋  
灘越えて白鳥島に降りて来よ



# 槐市集

柴田靖子

鳴く鳥に名前たづぬる冬夕焼  
夕日の染みる冬野に人影なき  
生きしもの皆息白し朝なり  
涸滝や雄姿のかげをひそませて  
映るもの皆とめおきて冬の水

庄司久美子

良門の錠しかと雪婆  
山茶花や坊ちやん電車のとまる音  
冬菜洗ふタタタタタの三連符  
氷海や南下の雲のゾウリムシ  
さざなみの栈橋伸びる寒の月

杉原ツタ子

灘越しの関の灯台冬の星  
蹲は舟形なりし実万両  
鳩遊ぶ光の影と鏡湖かな  
陸舟の五葉の松や冬ざるる  
秋篠や木の実の落つる音あまた

鈴木初音

薄寒い表裏一体雲画像  
凍て空にからくり時計鳴り出しぬ  
風花や神の峯峯そそり立つ  
山影の雪の深さを測りけり  
雪晴れの惜しみなくする水の音



高野昌代

火の色の負債一千兆円神の留守  
竜田姫の紅の衣か楓並木  
無量寿仏ほほえみ給へ十二月  
月光を零す宿屋の氷柱かな  
かしこみて聖夜の星を仰ぎみる

田中信行

イコン画を照らすキャンドル今朝の冬  
熱爛や女将の娘嫁ぎ行く  
夕闇にワグナーの曲賀状書く  
ときめきよ甦れクリスマスツリー  
次の一手決断迫る柚湯かな

谷岡尚美

独楽遊び口笛を吹く少女おて  
京終ぼてに茶粥すすりぬ冬の家  
渋柿をいつの間にか剥き終へる  
鰯買うて急ぐ家路の窓明り  
茶の花を好む母似となつてきし

寺田すず江

数へ日の襲ふがごとく流れけり  
建前と本音をからめ蔦枯るる  
日向には日向の匂ひ枯菴  
飾り気のなくそのままに花八ツ手  
枯菊の残り香ともに束ねけり

時澤藍

雪ずるや鬼どち尻餅ついたげな  
好きなこと言つて憎まれ虎落笛  
冬至から先は気持ちの軽くして  
葉屋を出て厳冬の虹二重  
多年草死んだふりして春を待つ

中貞子

手のひらに熱爛を抱く女正月  
はやぶさ2師走の空に打ち上ぐる  
天空に人の影あり冬の霧  
湯あがりの顔でてつきの前にゐる  
青が好き光の波のクリスマス

# 槐集

## 高橋将夫選

冬ぬくしだまされたいとだまし絵展 大阪 江島 照美

年忘結果は全て成果とす

その中に芽生えを抱ふ枯木立

ケイタイの電波届かぬ眠る山

大火背に千年睨む青不動

濁り皆除かれけさの初水

水面鏡神の姿の映る日も

氷上へ星落つる音ひびぎけり

朴落葉空のかけらの剥がれ落つ

ドアを開け寒夜に影の出でて来し

極月は版画のやうな木木に来る

マスクしてマスクの群れの人となる

枯れ山の火薬庫のまま眠りけり

数へ日の波が波追ふこころかな

聖樹光豪華もさびし雑踏も

大阪 江島 照美

有松 洋子

枚方 熊川 暁子

木の葉髪タンゴ踊りて恙なし 京都 中林 晴雄

焼売や朱色の街に冬の月

波起こし波引き寄せて紙を漉く

大注縄の撓み豊かに張りにけり

とろとろと炊くもの多し十二月

何さがす終の栖か冬の蝶 岡崎 柴田 靖子

枯蘆原あしたの力潜ませて

鷹の目や萎へし心を射ぬかれし

神の力ひそむとみゆる寒の水

風花に生きしもの皆静もれる

風花やもろ手さしのべ天意乞ふ 犬塚李里子

何や彼やまとめて過ぎし懐手

枯菊を括りことしの節目かな

雪女佇ちてわが窓見上げをり

天狼や淋しい時に兎は死ぬ

# 銀河往来 高橋将夫

◇『槐集』鑑賞

冬ぬくしだまされたいとだまし絵展 江島 照美

巧みな「騙し絵」に出合うと感動する。さて、どんな騙しの工夫を発見できるか、それが楽しみ。

〈年忘結果は全て成果とす〉の句、失敗も含めて全てを成果と考えると。この前向きな気構えを支持したい。〈その中に芽生えを抱ふ枯木立〉の句にもまた、前向きな視点がある。〈携帯の電波届かぬ眠る山〉の句では、「携帯」という今様の素材と「山眠る」という古典的な季語が不思議に調和している。〈大火背に千年睨む青不動〉の句では、青不動が実に雄大に詠まれている。

朴落葉空のかけらの剥がれ落つ 有松 洋子

大きな朴落葉を見て、空のどこかが剥がれたとみた作者の感性に共感。

〈濁り皆除かれけさの初氷〉、〈氷面鏡（ひもかがみ）神の姿の映る日も〉、〈氷上へ星落つる音ひびきけり〉の氷の三句、どの句にも作者ならではの鋭い感性がある。とりわけ、「星落つる音ひびきけり」の迫力は読者を圧倒する。

数へ日の波が波追ふこころかな 熊川 暁子

「波が波を追う」という景はさして珍しくないがそれを「師走のあわただしい気持ち」の具象化したところが手柄。

〈マスクしてマスクの群れの人となる〉は、もの・ことの本質を捉えている。リフレインも効いている。

〈極月は版画のやうな木木に来る〉の「版画のやうな木木に極月がくる」という表現は作者ならではのもの。芸といえよう。

波起こし波引き寄せて紙を漉く 中林 晴雄

波に着眼して、紙漉きの核心に迫っている。景が鮮明に浮かび上がる。

〈木の葉髪タンゴ踊りて恙なし〉のユーモアは作者ならではのもの。〈とろとろと炊くもの多し十二月〉では、「とろとろと炊くもの多し」が十二月の特徴を実にうまく捉えていると感心させられた。

神の力ひそむとみゆる寒の水 柴田 靖子

冷たい寒の水に触れたとき、確かにそんな気持ちになりそうである。掲句も、そして〈枯蘆原あしたの力潜ませて〉、〈鷹の目や萎へし心を射ぬかれし〉も作者の厳しい精神の風景。

天狼や淋しい時に兎は死ぬ 犬塚李里子

兎は繊細なのだ。天狼との取合せが絶妙。〈何や彼やまとめ過ぎし懐手〉の句が今の作者の感慨の全てなのだろう。〈枯菊を括りことしの節目かな〉の句を文字通り節目として新年を迎えてほしい。

みみづくの予言者めきて暗きにけり 寺田すず江

確かに、みみづくにはそんな雰囲気がある、〈あるときは星になりたき龍の玉〉〈凍蝶の壊れし音のかすかなる〉からは若々しい感性が伝わってくる。(以下略)